



◎建立年／昭和四十三年

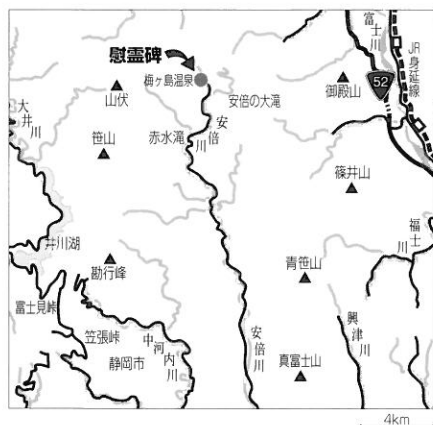
188

慰霊碑

昭和41年9月25日台風26号による遭難者



土砂で埋もれた梅ヶ島温泉の被災状況



▶ 交通案内

◎ JR東海道静岡駅を下車

新静岡駅静岡鉄道バス11番線のりば

梅ヶ島温泉行き 梅ヶ島温泉下車 徒歩約5分

▶ 所在地

静岡県静岡市梅ヶ島地先

▶ 水系名及び渓流名

安倍川水系三河内川

▶ 問い合わせ先

建設省静岡河川工事事務所 調査課 電話054-273-9104





91

山梨県

◎建立者 慰霊碑／倉科石材店主 倉科和一
◎建立者 歌碑／広里多美 他
◎建立者(由緒)／広里多美
◎建立年／昭和四十二年九月
◎建立年／昭和四十六年七月
◎建立年／昭和四十七年七月

慰霊碑・歌碑・由緒

昭和四十一年九月二十五日未明、台風二十六号は御坂山系に沿って北上し、山梨県南都留郡足和田村を直撃。時間雨量八十二・八ミリの局地的な集中豪雨は山津波を発生させ、大災害となった。とくに、西湖、根場両集落では午前一時から三十分の間に八十一名の死者、十三名の行方不明者を出すなど、多くの人命と財産が失われた。

被災後は、二度とこのような災害を受けないように安全な場所に全戸が移住するとともに、災害の予防に重点を置いた復興作業が行われた。また、将来にわたって住民の生命財産を保護するための砂防工事なども行われた。被災一周年の昭和四十二年には慰霊碑が、四十六年には歌碑が、四十七年には由緒が建立された。



碑文

(慰霊碑)

慰霊碑

山梨県知事 天野久 書

(歌碑)

ああ西湖よ

作詞 広里多美

作曲 館岡一郎

一、いつの日も父と

いつの日も母と

暖かくながめた

みずうみ

哀れ秋の日

平和は破れ

ああ西湖よ

悲しい湖

西湖 西湖よ

夕焼の空

涙に映えて

父も母も今は亡き

二、いつの日も兄と

いつの日も姉と

よろこびを包んだ

山々

哀れ秋の日

はげしい嵐に

ああ西湖よ

悲しい湖

西湖 西湖よ

尊い生命

湖底に深く

兄も姉も今は亡き

昭和四十六年七月

厚生大臣 内田常雄 書

(由緒)

昭和四十一年九月二十五日台風二十六号山津波により西湖根場両部落の尊い犠牲者九十四名中まだこの美しい湖に流出されたまま行方不明者十三名のミたまを偲びて哀悼の「あ、西湖よ」万感胸せまる想いで作詩し謹しみてその霊を永久に慰め二度と現世に惨事のないよう村民並びに寄贈者諸氏の善意と協力を以て建立せり人命尊重と平和を祈願する歌碑であります

昭和四十七年七月

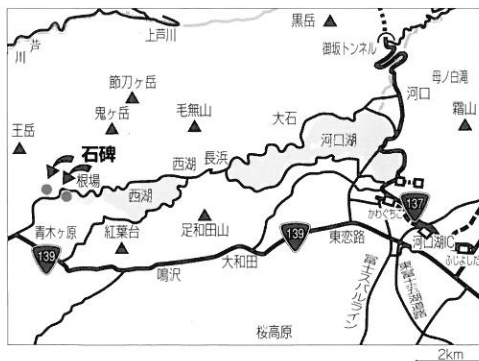
建立者 広里多美

○参考文献

台風二十六号災害から復興まで―足和田村



被災状況



▶ 交通案内

◎ JR中央線大月駅乗換え 富士急行線河口湖駅下車

富士急バス30分 西湖民宿下車 徒歩5分

▶ 所在地

山梨県南都留郡足和田村西湖地内

▶ 水系名及び溪流名

西湖水系本沢川

▶ 問い合わせ先

山梨県砂防課 電話0552-23-1711





92

神奈川県

◎建立者／神奈川県

◎建立年／昭和四十二年三月

早雲山地すべり 復旧工事完成記念碑

神奈川県箱根町強羅地先を流れる須沢は、神山の北東、早雲山の源頭に位置する大きな崩壊地（爆裂火口跡）早雲地獄から発する荒廃溪流である。

昭和二十八年七月二十六日早雲地獄源頭部に大地すべりがおこり、須沢に沿って流れ出た土石流は下流強羅橋までの二キロメートルを毎秒七メートルの速さで流下し、約八十万立方メートルの土砂を堆積させ、道了尊別院と堰堤十七基、観光自動車専用道路延長百四十メートル、山林七ヘクタールを土砂に埋没させ、宿泊客など死者十三名、負傷者十五名の犠牲者を出した。

災害後、抜本的な対策が検討され、砂防ダムの他、当時としては画期的な導流堤が建設された。この石碑は、一連の工事の完成と犠牲者の霊を慰めるため建立されたもので、使用された石は地すべりにより流下した土石の中にあつたものである。

碑文

昭和28年7月26日午前10時15分○大音響とともに早雲山谷頭に大地すべりが起こり、80万立方メートルに○○○土砂は1.5キロメートルの須沢を一気に流下し道了尊別院、県道大涌谷小涌谷線、強羅橋を埋没して13名の尊い人命○○○た。県は直ちに災害対策○○を設置し○界の権威により地すべりの原因を究明、対策上○○○○○○○○○○立し災害復旧工事並びに改良工事に着手した。以来○月○○○○○○○○有余年、工事費5億3千万円、セメント7千トン、延36万人の労力をもって昭和41年その工事を完了した。この事によって築設された○○基のえん堤群、8基の築堤群は箱根全山の永遠の平和と繁栄を約束するものである。地すべりの犠牲となられた13名の霊の心からなる冥福を祈り記念○○○

昭和42年3月



碑文



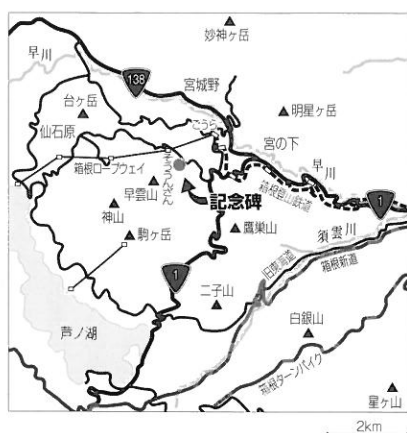
大湧沢早雲山航空写真 昭和23年9月30日撮影



大湧沢早雲山航空写真 昭和29年4月24日撮影



現在



交通案内

◎箱根登山鉄道「かみごうら」駅下車 県道大涌谷・小涌谷沿い 徒歩5分

所在地

神奈川県足柄下郡箱根町強羅地先

水系名及び溪流名

早川水系 須沢

問い合わせ先

神奈川県砂防課 電話045-201-1111



足柄下郡箱根町

水害遭難之碑

昭和四十二年七月九日、中国地方南部を集中豪雨が襲った。「水害遭難之碑」のある広島県安芸郡浦刈町大浦地区も、地区としては史上例を見ない多大な被害を被った。梶屋川などの氾濫により、死者五名、負傷者六名、家屋の全半壊二十七戸、道路水路の決壊は実に二百十三箇所に及んだ。田畑の流失も三十四町歩に上っている。本碑は、こうした災害を繰り返すことの無いよう、また災害防止の重要性を後世に伝えることを目的に、昭和四十三年七月、大浦地区によって建立された。

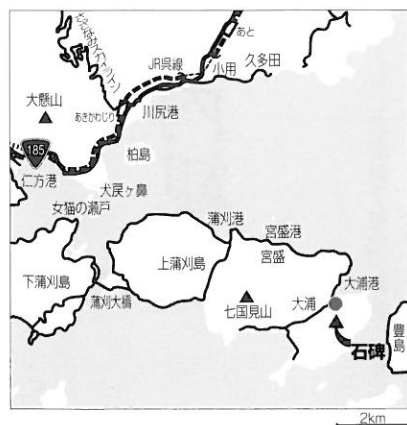


碑文

表 面
水害遭難之碑
裏 面

昭和四十二年七月九日中国南部地方ヲ襲ツタ
集中豪雨ハ当大浦ニモ未曾有ノ被害を与エ死者
並ニ負傷者ノ外家屋流失各所ニ生ジ其ノ復興モ
原形ヲ留メザルモノ多ク後世ニ災害防止ノ重要
性ヲ銘記セシメシガ為ノ比ノ碑ヲ建ツ
昭和四十三年七月

死者五名
負傷者六名
家屋全壊五戸半壊二十一戸
公共物流失火葬場一棟
田畑流失三十四町五反
道路水路等欠壊二百十三ヶ所
大浦區建之



交通案内

◎宮盛港下船 車で約20分

所在地

広島県安芸郡蒲刈町大浦

水系名及び溪流名

梶谷川

問い合わせ先

広島県砂防課 電話082-228-2111





94

新潟県

◎建立者／越後胎内観音奉賛会
◎建立年／昭和四十五年八月二十八日

◆羽越水害◆

越後胎内観音

昭和四十一年七月十六日に新潟県下越地方を襲った集中豪雨は、三日間にわたって降り続いた。そのため胎内川は毎秒百トンを超す濁水が激流し、中小河川がいたるところで氾濫するに至り、新潟県北蒲原郡黒川村は水攻めの大被害を受けた。

さらに、昭和四十二年八月二十八日には集中豪雨により土石流が発生し死者・行方不明三十二名、家屋の倒壊・埋没・流失百二十一棟、田畑の流埋冠水五千ヘクタール、道路・橋梁の決壊流失など、郷土史上いまだかつてない惨事となり、黒川村は壊滅的な打撃を受けた。

この二年連続の大水害に対し、村長を先頭に「災を転じて福となす」を合言葉に再建に取り組むとともに、殉難者の冥福と災害復興を願って昭和四十五年日本一の大観音像を建立したものである。



越後胎内観音の由来

奉讃会名誉会長 巨四郎
奉讃会会長 伊藤孝二郎

昭和四十一年、二年の集中豪雨による黒川村の土石流災害は死者三十二名、負傷者八十三名、家屋の全壊流失百二十一棟農地五千余ヘクタールその他総額百十四億円余の巨額に達した。

ここに一大観音像を建立して殉難者の冥福を祈り、さらに災害の復興国土の安全将来の平和繁栄を念ずることとした。

思えば悟れぬ人々は生老病死に悩み、名利愛欲に苦しみ争奪悲喜に明け暮れ無明の闇に迷っていた。その上敗戦は国民の自信を失わせて行動の混乱を招き、科学の進展によるめまぐるしさは安省の時を奪い、他を顧みず事業は公害を拡大するに至った。

いまこの大災害に遭い、うちひしがれたこの窮地をのりこえ、さらに飛躍向上を願って観音を勧請した。鳥坂山を背にして、けだかく立たれた観音は慈眼もて衆生をみそなわしながらゆつたりと合掌して祈念をこらしておられます。

わたくしどもも、静かに合掌してわが一切の煩惱をはらい、清く豊かな心になりましょう。

復興の人柱となられた三十二柱のみ霊がとこしえに安らかであるよう冥福をお祈りいたします。

生き残ったわが身の幸福を身にしみて感じわが全力を奪い起して復興と発展に尽くしましょう。

南無大慈大悲の観音のみにひざまずき再びかかる災害の起らぬようお祈りしさらに、わが身、わが村、わが県、わが国ひろく世界人類の平和と繁栄とをお祈りいたします。

昭和四十五年八月二十八日 渡辺秀英撰並書



黒川村被災状況



黒川村胎内川被災状況



▶交通案内

◎JR羽越線中条駅下車 新潟交通バス胎内温泉湯元行き樽ヶ橋停留所下車 徒歩2分

◎国道7号線下館交差点より2km 車で2分

▶所在地

新潟県北蒲原郡黒川村大字下赤谷(道の駅 胎内)

▶水系名及び溪流名

胎内川水系胎内川

▶問い合わせ先

新潟県砂防課 電話025-285-5511

建設省飯豊山系砂防工事事務所 調査課 電話0238-62-2566



◆羽越水害◆

復興記念碑

昭和四十二年八月二十八日、新潟、山形、福島の羽越地方を集中豪雨が襲い、三県の被害は死者、行方不明百四十六名、家屋の全半壊千三百六十四棟にのぼった。とりわけ新潟県の各地では山津波が発生し、三川村で十四名、黒川村で三十二名という死者、行方不明者が出た。関川村も大洪水によって村の全域に壊滅的な被害を受け、死者、行方不明者は県内最多の三十八名を数えた。

災害後は国、県をはじめとする支援を受け、村民は一体となって復旧に務め、四十六年に至つてようやく復興をみた。そこで関川村では昭和四十六年八月二十八日、復興を記念し、村の限りなき発展を祈願して「復興記念碑」を建立した。



碑文

表面

復興記念碑

新潟県知事 亘 四郎 書

裏面

復興記念碑について

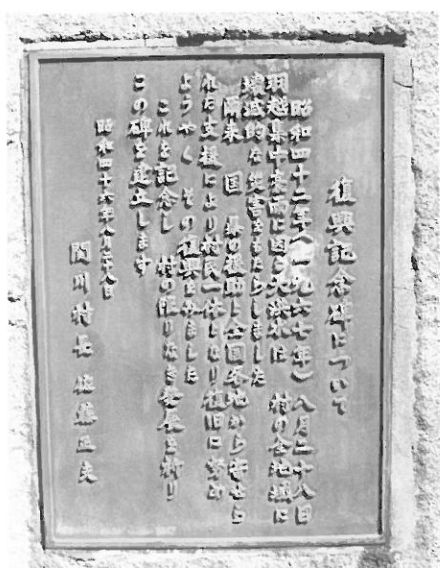
昭和四十二年（一九六七年）八月二十八日、羽越集中豪雨に因る大洪水は、村の全地域に壊滅的な災害をもたらしました。

爾来、国、県の援助と全国各地から寄せられた支援により村民一体となり復旧に努めようやく、その復興をみました。

これを記念し、村の限りなき発展を祈り、この碑を建立します。

昭和四十六年八月二十八日

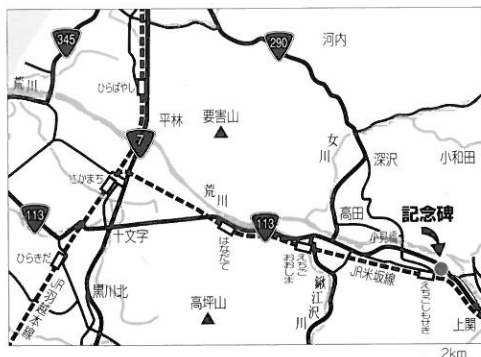
関川村長 佐藤正夫



現況



被災状況 1階は全て土砂で埋っている



交通案内

◎JR米坂線越後下関駅下車 徒歩10分

国道113号上関交差点より100m

所在地

新潟県岩船郡関川村上関の関川村民体育館前

水系名及び溪流名

荒川水系荒川

問い合わせ先

建設省飯豊山系砂防工事事務所 調査課 電話0238-62-2566



◆ 羽越水害 ◆

羽越水害復興記念碑

昭和四十二年八月二十八日夜半から二十九日未明にかけて、日本海中部の低気圧からのびる前線が北陸を通り、関東北部で活発に活動した。新潟県東蒲原郡三川村では四百ミリを超える記録的な集中豪雨によって未曾有の大災害となり、死者、行方不明者十八名、家屋の流出全壊八十二戸、農地の流失埋没百十七ヘクタールに及んだ。

災害後全村民は一丸となって復興に立ち上がり、国、県をはじめとする力添えを得ながら、昭和四十二年十月に災害復旧事業を開始。以来三年五カ月の歳月と四十一億九千万円の巨費を投じて復旧事業は完成した。三川村綱木部落では災害復旧を記念して、昭和四十六年八月に復興記念碑を建立した。



羽越水害復興記念碑

三川村長 徳田房三郎書

碑文

羽越水害復興記念碑
三川村長 徳田君三郎書

裏面

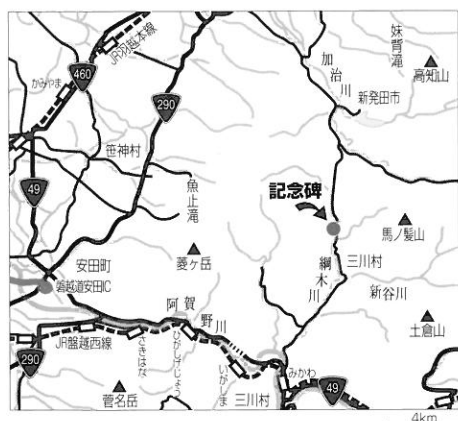
昭和四十二年八月二十八日夜半来の集中豪雨は翌二十九日未明四百ミリを超える雨量となり綱木川は山腹崩壊による土石流が鉄砲水となって部落を襲った山くづれによる倒壊家屋三戸全壊流出七戸半壊十一戸床上浸水四十二戸を数え耕地の殆どが冠水し流失埋没三十町歩に達し道路の欠壊橋梁の流出により交通通信は全く途絶する大災害となった村を挙げて復興にあたること四ヶ年余の歳月を費し道路河川 農地農業用施設等の災害復旧工事が完成されたことを記念し部落民一同の浄財により昭和四十六年八月この碑を建立した



被災状況



新谷川現況



交通案内

◎新潟中央インターチェンジから安田インターチェンジまで20分
安田インターチェンジより綱木まで 車で約40分

所在地

新潟県東蒲原郡三川村大字綱木

水系及び溪流名

阿賀野川水系綱木川、新谷川

問い合わせ先

新潟県砂防課 電話025-285-5511





97

新潟県

◎ 建立者 / 三川村

◎ 建立年 / 昭和四十六年九月

◆ 羽越水害 ◆

慰霊碑

羽越水害の慰霊碑である。

昭和四十二年の羽越水害後、新潟県東蒲原郡三川村では三年五カ月の歳月と四十一億九千万円の巨費を投じた災害復興事業により、上の沢川と下の沢川には護岸工事が、上流には砂防ダム二基が完成した。これを機に十八名の霊を弔う慰霊碑を建立した。

碑文

表面
慰霊碑 新潟県知事 亘 四郎
裏面

昭和四十二年八月二十八日県北部に発生した集中豪雨による羽越水害は、翌二十九日未明山地に大崩壊を起こし溪流は暗黒の土石流となり次の十八名の人命を奪い村政史上かつてない大災害となった

石間 板屋越 一男

一美

文子

一子

静江

さとみ

山口 春松

ハツエ

藤子

潔

石井 政美

益江

久美子

細越 神田 和喜知

長谷川 政夫

シユン

上島 神田 与太郎

神田 レン

災害復旧事業の完成を機に、ここに亡き霊を弔い大自然の与えた戒しめを永く後世に伝えるため水害の際に押し出された自然石を用いこの碑を建立する

昭和四十六年九月

三川村長 徳田君三郎



被災状況



上ノ沢川現況



交通案内

◎JR磐越西線東下条駅から徒歩で15分

新潟中央インターチェンジから安田インターチェンジまで車で約20分

安田インターチェンジより国道49号を経て三川まで車で約10分

所在地

新潟県東蒲原郡三川村大字小石取

水系名及び溪流名

阿賀野川水系上ノ沢川・下ノ沢川

問い合わせ先

新潟県砂防課 電話025-285-5511





98

新潟県

◎建立者／安田町都辺田部落 鯉園店主
◎建立年／昭和四十九年八月二十九日

◆羽越水害◆

都辺田観音

昭和四十二年八月二十九日の朝、新潟県北蒲原郡安田町都辺田地区一帯をツバタ土石流が襲った。これは前日から降り続いていた豪雨がもたらしたもので、都辺田川に発生した土石流の被害は死者、行方不明者六名を数え、全壊流失家屋は十一戸に及び、その規模は下越水害地域のうちでも最大級のものであった。

土地の言い伝えでは、この地に人が住むようになってから数多く災害に見舞われ、家も耕地もそのたびにつぶれたことからツバタと呼ばれるようになったとの説もあるが、それが地名になったのかどうかは定かではない。昭和四十九年、この災害で亡くなられた方々の供養とともに再びこのような災害が起こらないよう祈願して石像が建てられた。

碑文

建像の主意

一・先佛の供養

二・無災安全を祈願する

記

昭和四十二年八月二十九日朝、この地域一帯を襲った豪雨（八・二八）災害等で亡くなられた方々の供養と共に再度あのような災害の起こらぬよう祈願するものである。

説

四千年程前から人が住んで居たという。確かにその跡はある、私達の祖先も数回にあの様な災害にあいその度毎に多くの人命を失い、家も農地もあの様になったものと想像出来る、住い、都ではあるが昭和の代にもあの大災害があったことを忘れぬよう石像を残す。

地名

古い都辺田であるが、地名は誰がつけたか誰も知らんという。

説

一・老人の伝説である、昔落人が住み、米作りをしたところ、何処に田を作ってもうまい米が沢山穫れ、この辺りは田の都であると言ったのが都辺田と名付けられたと言う者もある。

二・アイヌ人が住んで居り、アイヌ語で付けた地名がツベタとなったと言う人もある。

三・人が住むようになってから数回災害があり、家も耕地も度毎につぶれ無論人命も多く失われその度毎につぶれたつぶれたと言った言葉が都辺田となったのだと言う笑言も聞く。都辺田古跡資料は、安田町教育委員会に保存されている。

都辺田部落名の正解を望む。

鯉園店主

技作者

詩谷誠次郎

真部 一雄

漆山 省一

小野里民三

昭和四十九年八月二十九日 命日



対策工着手前



都辺田川現況



▶ 交通案内

◎磐越自動車道安田インターチェンジより5km 車で5分

▶ 所在地

新潟県北蒲原郡安田町ツベタ地内

▶ 水系名及び溪流名

阿賀野川水系都辺田川

▶ 問い合わせ先

新潟県砂防課 電話025-285-5511





99

山形県

◎ 建立者／小国町

◎ 建立年／昭和五十九年十一月三日

◆ 羽越水害 ◆

禍いを轉じて 福と為す

昭和四十二年八月二十六日、日本海に発生した低気圧が東に進みながら活発に活動したために、八月二十八日から二十九日にかけて新潟県下越地方から山形県南西部は記録的な集中豪雨に見舞われた。

山形県西置賜郡小国町では、異常に活動化した寒暖両気団により、八月二十八から二十九日にかけて大雨が降り続き、町の中心部で五百三十二ミリを記録した。河川は氾濫し、各地で土砂崩れが続出した。人身被害は死者一名であったが、家屋の全壊流失六十三棟、浸傷千三百余棟など、道路橋梁、通信施設の被害は激甚で、未曾有の大災害といわれた。被害総額は山形県総被害額の三十%を占める七十六億余の巨額にのぼり、小国本町は壊滅的な打撃を受けた。

この大災害に対し、町長を先頭に「禍いを転じて福と為す」を合言葉に再建に取り組みみごと復興をとげた。この石碑は、殉職者の冥福と災害復興を記念して昭和五十九年に建立したものである。

碑文

表面
禍いを轉じて福と為す

裏面
小国町長 今 周一郎 書

記

昭和四十二年八月二十八日の羽越集中豪雨は雨量五百三十二ミリメートルを記録する未曾有の大洪水となり町の全域に壊滅的な災害をもたらした。

その規模は死者二名負傷者二十名家屋の全壊流失六十三棟浸傷千三百余棟農地八百余ヘクタール交通通信施設千二百余箇所その他総額七十六億円の巨額に達した。爾来十余年国県並びに各界有志のご指導とご支援を仰ぎ町民一体となって災害の復興と新しい町づくりに努めようやく村づくりの日本一の栄譽を得るまでに至った。ここに新町三十年と災害復興を記念しさらに町勢の限りなき発展を祈つてこの碑を建立する

昭和五十九年十一月

小国町長 今 周一郎



被災状況

流木で山となった小国橋



交通案内

◎JR米坂線小国駅下車 徒歩10分

◎国道113号小国営林署前の交差点より100m

所在地

山形県西置賜郡小国町大字緑町おぐに開発総合センター前

水系名及び溪流名

荒川水系荒川

問い合わせ先

建設省飯豊山系砂防工事事務所 調査課 電話0238-62-2566





100

愛知県

◎ 建立者 / 小原村

◎ 建立年 / 昭和五十年十月

災害復興記念碑

昭和四十七年七月十二日夜半から十三日未明にかけて、愛知県西三河地方の山間部を中心に大規模な土砂崩れ、土石流などが発生した。これは梅雨前線による最大時間雨量七十七ミリという集中豪雨を原因とするもので、小原村では三十二名の尊い人命と数多くの施設、財産に甚大な被害を受け、被害総額は百数十億円に達した。ちなみに、西三河の豊田市、藤岡村（現藤岡町）、小原村の死者・行方不明者は六十七名、約半数が小原村での被害であった。この災害を地元では「7・7豪雨災害」と名づけた。

国や県をはじめ各界からの援助と協力によって、災害復旧事業は三年余で完成。昭和五十年十月に小原村の新生を記念して、犠牲者を慰霊するためにこの石碑を建立したものである。

碑文

昭和47・7集中豪雨
災害復興記念碑 愛知県知事 仲谷義明 書
裏面

昭和四十七年七月十二日夜半より十三日未明にかけて本村を襲った集中豪雨は、総雨量二百八十四ミリ最大時間雨量七十七ミリを記録し、三十二名の尊い命を奪い、数多くの財産と施設に甚大な被害をもたらした。その総額は百数十億に達した。

爾来これが復旧については、国県をはじめ各界挙げてのご援助とご協力により、村民一丸となって復興に務め、三年有余の歳月をかけて新生小原村の姿を見るに至った。

ここに復興を記念して碑を建立し殉難者の霊にこたえと共に併せて関係各位に心から感謝の誠を捧げる次第である。

昭和五十年十月

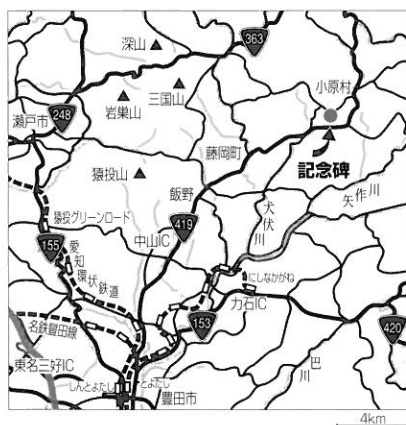
小原村長 高見和史



被災状況 田代川



復興状況



交通案内

- ◎愛知環状鉄道「しんとよた」駅下車名鉄バス乗換
名古屋鉄道豊田線「とよたし」駅下車バス乗換
名鉄バス上仁木行き「小原大草」停留所すぐ
- ◎国道419号線小原村大草交差点より役場へ

所在地

西加茂郡小原村大字大草地先小原村役場

水系名及び溪流名

矢作川水系犬伏川

問い合わせ先

愛知県砂防課 電話052-961-2111





101

栃木県

◎ 建立者／日光砂防協会

◎ 建立年／昭和四十八年八月二十一日

砂防塔

日光の河川は、古くから氾濫を起こしてきた。天長四年（八一四年）、天文年中（一五三一―一五三四年）、寛文二年（一六六二年）、明治三十五年（一九〇三年）の大洪水など枚挙に暇がない。これらの災害では、しばしば土石流になり多数の死者を出し、家屋、田畑、橋梁を流失するなど、住民は甚大な被害をこうむってきた。

このため元禄以降、いくたびか治水対策がすすめられたが、特に大正七年（一九一八年）八月二十一日稲荷川第一堰堤の着工以来、ようやく近代河川の姿を整えてきた。この砂防塔は、積極的に砂防事業に取り組んだ日光市長・佐々木耕郎氏が昭和四十五年に建設大臣の表彰を受けたことを契機とし、稲荷川堰堤着工の日付に合わせて建立された。

碑文

顕彰碑

日光の河川は、古くは天長四年（八二四）、天文年中（一五三二）一五三四、寛文二年（一六六二）近くは明治三十五年の大洪水など、しばしば洪水の土石流による大災害をもたらし、その都度沿岸住民は多数の死者を出し家屋、田畑、橋梁を流失するなど甚大な被害を蒙つてまいりました。

水源の荒廃河岸の崩壊は放置しがたい状況となり、元禄以降いくたびかその対策が講じられましたが、特に大正七年八月二十一日稻荷川第一堰堤の着工以来、政府・県の砂防対策はとみに厚きを加え、関係者歴年の御努力のもと、堰堤工、床固工、山腹工、護岸工、流路工、洪水調節施設など近代土木技術の粋を駆使した施工を累ね日光の河川は今日みる通りの近代河川に生まれかわり沿岸の開発も可能となったのであります。けだし沿岸住民の浴する恩恵は測り知れぬものがあります。

よつてわれわれは、国土の大水源として日光の治水砂防事業の重要性を再認識してその百年の大計の貫徹を期するとともに往年の洪水犠牲者ならびに砂防工事施工殉職者に慰霊の誠を捧げ、日光砂防事業関係者多年の苦勞に感謝してその御功績を顕彰するため、ここに大谷川産の名石をえらんで砂防塔を建立するものであります。



交通案内

◎JR日光線日光駅 東武日光線日光駅下車 徒歩20分

◎国道119号松原町交差点より車で約5分

所在地

栃木県日光市所野地先

水系名及び溪流名

利根川水系鬼怒川右支川大谷川

問い合わせ先

建設省日光砂防工事事務所 調査課 電話0288-54-1191



やすらぎの塔

昭和四十九年七月六日、多くの美しい自然が残る風光明媚で温暖な香川県小豆島の内海町を、台風にとまなう日雨量三百六十五ミリの豪雨が襲った。この豪雨は大規模な土石流を発生させ、内海町では死者二十九名にも及ぶ大災害をこうむった。さらに、その復旧工事も完了しようかという矢先の五十一年九月八日から十三日にかけては、四十九年の豪雨をはるかに上回る日雨量八百十九ミリのすさまじい豪雨に見舞われた。そして再び土砂災害などが発生し、六名の尊い生命が奪われたのである。この二度にわたる大災害の犠牲となられた方々の御霊を慰めるとともに、二度と悲しみの歴史を繰り返さないことを祈念し、土石流となり荒れ狂った土石を集め、「やすらぎの塔」と名付けた慰霊塔を建立したものである。



昭和51年被災状況



昭和51年災害復興状況



小豆島は、年間降雨量が千ミリから千二百ミリと、全国有数の雨の少ない地域で、災害も比較的小なかつた。しかし、近年、集中豪雨に見舞われることが多く、ここ十年間に三度も大災害を経験した。昭和四十六年八月三十日の台風二十三号では、最大時間雨量四十六ミリ、日雨量四百五十三ミリ、連続雨量四百九十三ミリの豪雨が降った。この雨で、片城川支流小坪東川上流に土石流が発生し、道路の一部が崩壊して、死者一人、負傷者三人、倒壊家屋一戸の被害が生じた。

続いて、三年後の昭和四十九年七月六日には、台風八号に伴う豪雨で、再び大災害が発生した。この日、午後から降り始めた雨は、夜半になって激しさを増し、最大時間雨量九十二ミリ、日雨量三百六十五ミリ、連続雨量三百八十一ミリに達した。この雨で、町内各所に大規模な土石流や、河川の氾濫、堤防の決壊、家屋の流失、倒壊、浸水などが続出した。特に、安田、橘、岩谷、福田、吉田の各地区の被害は甚大で、死者二十九人、負傷者四十一人、全、半壊家屋百二十八戸、浸水家屋千九百三十六戸を数え、被害総額は四十一億円に達した。

四十九年災害は、百年に一度といわれる大災害であつた。このときの尊い犠牲を教訓に、二度と悲惨な災害を繰り返すまいと、復旧工事や防災対策に全力をあげ、ようやくその工事も終わろうとした矢先、三たび集中豪雨による大災害に見舞われた。昭和五十一年九月八日から、十三日にかけての台風十七号による災害である。

このとき、断続的に降り続いた雨は、六日間で内海町の年間降雨量を上回る千四百ミリにも達した。特に、十一日には最大時間雨量九十四ミリ、日雨量八百九十九ミリを記録した。

このすさまじい豪雨で、町内全域に、「山崩れに伴う土石流災害」「山地表層や人工法面の崩壊による災害」「地すべり災害」「溜池や河川の決壊による災害」など、水にかかわるあらゆる災害が発生した。これだけの災害で、死者六人とどめることができたのは、四十九年災害の教訓が立派に生かされたものと思われる。しかし、負傷者五十四人、全半壊家屋二百六十四戸、浸水家屋二千七百三十四戸におよび、被害総額は八十四億円と、県災害史上未曾有の大災禍となった。

四十九年と五十一年の両災害は、激甚災害法の適用を受けた。両災害とも、余りの悲惨さに、住民は驚愕と絶望と不安で茫然自失の体であつた。しかし、陸、海上自衛隊をはじめ、海上保安部巡視艇や、県警察機動隊、地元消防団などの救援活動、さらには、国・県をはじめ、全国各地から寄せられた物心両面にわたる温かい支援に勇気づけられ、復旧と防災対策に力強くたが上がつた。そして、ようやくここに、平和で住みよい郷土を取り戻すことができた。

この平和を再び失ってはならない。「災害は忘れたころにやってくる」といわれる。この言葉を肝に銘じ、二度と悲しみの歴史を繰り返さないことを祈念して、この地に災害慰霊塔を建立し「やすらぎの塔」と名付ける。この塔には、今次災害の犠牲となった三十六人の御霊を慰め、かつての災害で幾多の尊い人命と財産を奪って荒れ狂った土石を集めてその魂を鎮め、平和で豊かな郷土「うちのみ」をつくる願いを込める。

諸霊よ、安らかに、安らかに眠りたまえ。そして、いつまでも、われらの郷土を守りたまえ。

昭和五十五年七月

内海町長 川北 四十二



▶ 交通案内

◎ 高松港より内海フェリーにて草壁港

路線バス(坂手港行き)安田下車 徒歩8分

▶ 所在地

香川県小豆郡内海町

▶ 水系名及び溪流名

片城川支流小坪東川

▶ 問い合わせ先

香川県砂防課 電話0878-31-1111





103

滋賀県

◎ 建立者／建設省琵琶湖工事事務所

◎ 建立年／昭和四十九年十一月八日

砂防百年の碑

万葉の時代にはヒノキ、スギ、カシの美しい林を持っていた滋賀県田上山は、江戸時代末期になると、「東西に一里半、南北に一里、一本の木もなし」といわれるほど、荒廃がすすんだ。明治五年（一八七二年）滋賀県が、続いて明治十一年には国が施工する砂防事業に着手し、百二十年を経過して、ようやく山に緑が回復されたのである。

この田上山を流れる瀬田川を含む淀川水系の治水工事は、明治政府がオランダからヨハネス・デ・レーケなど、治水技師を招きその指導のもとに着手してから、昭和四十九年（一九七四年）に百年を迎えた。これを記念して、大津市枝の田上公園入口に「砂防百年」の記念碑が建てられた。先人の努力を讃え、偉大な業績を後世に伝えるものである。

碑文

表面

砂防百年1974

石山寺座主 鷲尾隆輝

側面

萬葉集 藤原宮之役民作歌

いはばしる 近江の国の衣手の

田上山の 真木さく檜のつまでを

もののふの 八十字治川に

玉藻なす浮かべ流せれ

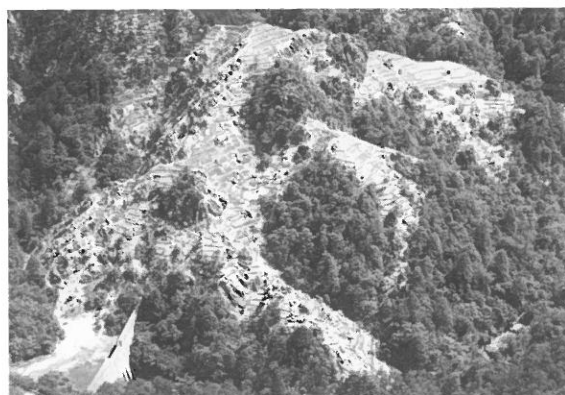
碑文

万葉の昔、ヒノキ、スギ、カシの美林であった田上山は江戸時代末期には一点の緑もないはげ山となった。

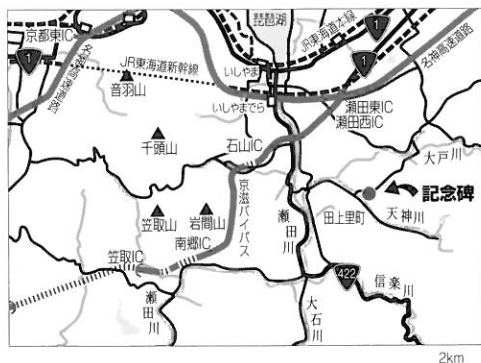
明治五年から滋賀県が砂防事業に着手し、その後明治十一年からは内務省(今の建設省)が施工して今日まで百年を越える長い間山腹緑化に努力してきたものである。

ここに先人の努力を称えるために、記念碑を建立してその偉大な業績を後世に伝えるものである。

揮毫者 石山寺座主 鷲尾隆輝



現在も行われている山腹工



交通案内

◎JR草津線石山駅下車 帝産バス田上車庫前行き 枝バス停下車すぐ

所在地

滋賀県大津市田上枝町地先

水系名及び溪流名

淀川水系天神川

問い合わせ先

建設省琵琶湖工事事務所 調査課

電話0775-46-0844

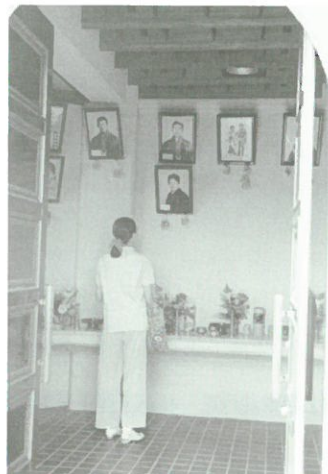


追善供養観音像

昭和五十年八月五日の夜半から六日の未明にかけて、雷雨をともなった集中豪雨により発生した土石流が岩木山麓の百沢集落を襲った。これによって住居二十二棟が一瞬のうちに流され、二十二名の尊い命をはじめ貴重な財産が奪われた。

この激甚災害の指定を受けた岩木町百沢地内の蔵助沢土石流災害は、関係機関の復興にかける熱意と意気込みによって、砂防一定災害としてわずか二カ年で復旧を果たした。

岩木町では工事の竣工を期に観音像建立協賛会を発足させ、犠牲者の冥福を祈る追善供養のために、三回忌を期して観音像と示現堂（資料館）を建立した。現在も毎年八月六日に慰霊祭を挙行している。



資料館（示現堂）内部





土石流被災状況 岩木川水系蔵助沢



復旧状況



▶ 交通案内

- ◎ JR奥羽本線弘前駅下車 弘南バス 岳岩木山スカイライン
岩木山神社前バス停下車 徒歩2分

- ◎ 国道7号サンワドー前交差点より27km 車で約30分

▶ 所在地

青森県中津軽郡岩木町百沢地先

▶ 水系名及び溪流名

岩木川水系蔵助沢

▶ 問い合わせ先

青森県砂防課 電話0177-22-1111





105

山形県

◎ 建立者／真室川町長 松沢重太郎(当時)

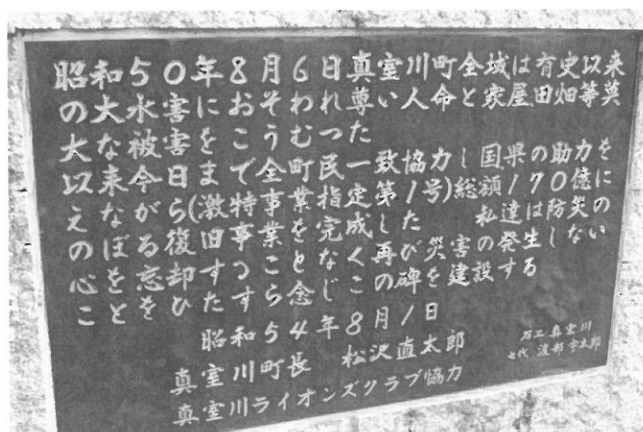
◎ 建立年／昭和五十四年八月二日

防災記念碑

昭和五十年(一九七五年)八月六日、山形県最上郡真室川町は大災害に襲われた。未明より寒冷前線が活発化し、県境の山岳部の、主寝坂観測所で最大日雨量二百二十五ミリを記録するという強い雨を降らせ、山沿いの小河川がいたるところで増水、土砂を含む激流が真室川に流れ込んだ。このため、川沿いの家、農地の多くが押し流され、また、各地で土石流、山腹崩壊による被害が発生した。太滝駅では、臨時停車中の「津軽二号」に土石流が近くの民家を押し流しながら襲いかかり、二名の犠牲者を出した。

復興は激特事業指定第一号の指定を受け、全町民一致協力の元、国、県の助力を得ながらなす遂げられた。この石碑は工事の完成と二度とこのような災害の発生がないことを祈念して昭和五十四年に建立された。

碑文



表面

防災記念碑 衆議院議員 松沢維蔵書

裏面

昭和50年8月6日真室川町全域は有史以来の大水害におそわれ尊い人命と家屋、田畑等莫大な被害をこうむった

以来今日まで全町民一致協力し国、県の助力をえながら(激特事業指定第1号)総額170億にのぼる復旧事業を完成した 私たちは防災の心を忘却することなく再び災害の発生しないことをひたすら念じこの碑を建設する

昭和54年8月1日

建立者 真室川町長 松沢直太郎

真室川ライオンズクラブ協力



土石流により横転した津軽2号と倒壊した民家 (写真提供: 山形新聞社)



交通案内

◎JR奥羽本線真室川駅下車 徒歩5分

所在地

山形県最上郡真室川町(真室川公園入口)

水系名及び溪流名

最上川水系鮭川流域

問い合わせ先

建設省新庄工事事務所 調査課 電話0233-22-0251





106

高知県

◎ 建立者／吾北村

◎ 建立年／昭和五十四年十一月二日

災害復旧記念碑

昭和五十年八月十七日に高知県を直撃した台風五号は、県中部に記録的な集中豪雨をもたらし、各地に無数の土砂災害や浸水被害を発生させた。その被害は人的被害七十七名、建物被害三万四千四百五十八棟、公共施設の被害総額千四百億円にもものぼり、十九市町村に災害救助法が適用される高知県災害史上未曾有の激甚災害となった。また翌年も台風十七号の豪雨による地すべり崩壊や河川の氾濫などが起こった。

吾北村もこの二度にわたる災害によつて甚大な被害をこうむつたが、五十四年十一月には復旧もほぼ完了。そこで各方面に感謝の意を表わすとともに、犠牲者の冥福を祈るためにこの災害復旧記念碑を建立したものである。

碑文

表面

災害復旧記念碑

高知県知事

中内力書

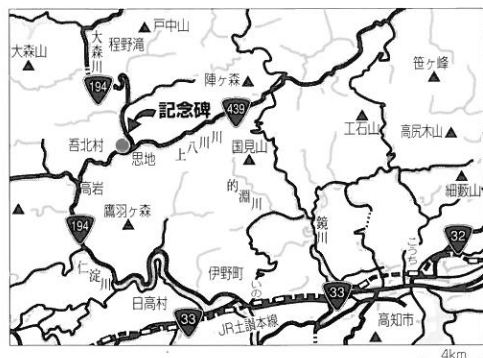
裏面

災害之記録

本村は昭和五〇年五年と相次いで豪雨による大災害が発生し甚大な被害をうけたが復旧もほぼ完了するに至った。これを契機として復興祭を実施するにあたり豪雨の爪跡をここに記し災害への教訓として永く後世に伝える。昭和五〇年八月一七日日本県を直撃した台風五号は本村に総雨量一四七ミリ当日雨量七一ミリ一時間最高一五ミリという未曾有の集中豪雨をもたらした。この豪雨により山崩れ各所に起り谷川悉く氾濫し怒どうの如き濁流は忽ちにして道路を没し沿岸の住家田畑を押し流した流失を免れた住家には流水瓦礫を山と残す停電全戸に及び交通通信凡て途絶し陸の孤島と化す。この災禍による被害は五人の尊い人命を失い負傷者一八人住家の全壊流失八五棟半壊浸水二八〇棟土地の流失埋没約五百ヘクタールこの外被害は非住家家財作物並びに公共施設に大きく及び被害総額は約二百億円に上る。村に災害救助法が発動され各方面から温かい救援をうける。復旧は激甚災害指定により国の特別財政援助のもと三ヶ年をもつて行ふ。村事業費三七億二千万円。県営事業費七五億七千万円。翌五一年の台風一七号は九月一二日を中心に総雨量一四七六ミリ一日雨量最高五〇五ミリという前年を凌ぐ豪雨を再び本村にもたらし住家の全壊四棟半壊浸水六七棟非住家損傷四五棟の被害をうけると共に特にこの連日豪雨は村内各所に大規模の地滑りを起し居住不能世帯三六を出す。被害総額は約七〇億円に上る。復旧費は村事業費一九億六千万円。県営事業費二〇億二千万円。

これら復旧事業の完了は災害発生以来物心両面に亘る国県各機関及び各方面からの温かい援助と村職員全村民の不断的努力によることを銘記し併せて犠牲者の冥福を永遠の祈りとする。

昭和五四年十一月 吾北村長 筒井直和記



交通案内

◎JR土讃本線伊野駅下車

県交通バス長沢行き吾北村役場前バス停下車

所在地

高知県吾川郡吾北村柚/木野1934地先

問い合わせ先

高知県防災砂防課 電話0888-23-1111(代表)
0888-23-9842(直通)



碑文

昭和50年8月17日発生
台風5号災害碑
昭和56年8月17日建立
(1981年)
鳴川部落

107

高知県

◎建立者／土佐市鳴川部落民一同

◎建立年／昭和五十六年八月十七日

台風5号災害碑

昭和五十年八月十七日、台風五号が高知県を直撃し、記録的な豪雨をもたらした。とくに県中部では無数の土砂災害や浸水被害が発生し、十九市町村に災害救助法が適用される高知県災害史上まれにみる激甚災害となった。被害状況は人的被害七十七名、建物被害三万四千四百五十八棟、公共施設の被害総額一千四百億円にものぼった。

土佐市も多大な被害に見舞われたが、とくに鳴川部落では多数の土砂崩れ・浸水などにより壊滅的な被害を受けた。そこで部落民は用地のみならず私財・労力を提供し、災害の早期復旧や抜本的に安全に生活できるための工事を全面的に支援した。台風5号災害碑は、昭和五十六年八月十七日に災害の教訓を後世に伝えるために建立された。

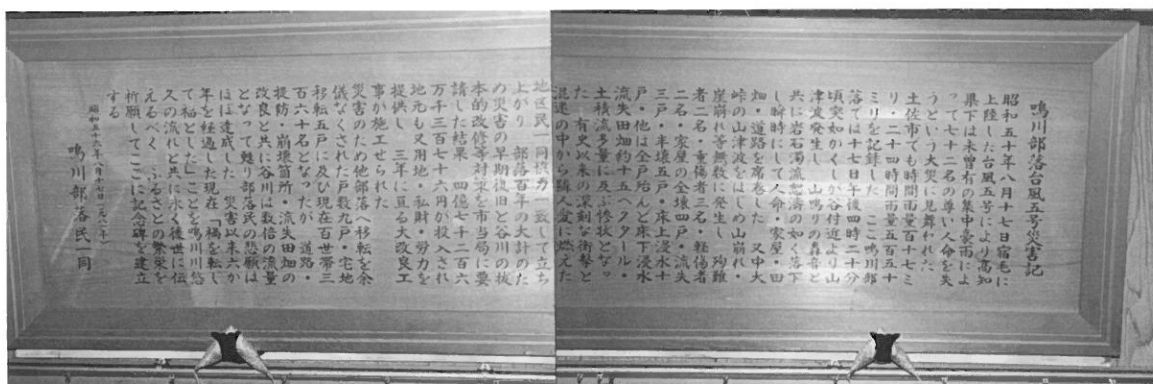
鳴川部落台風五号災害記 石碑建立地地区集会所所蔵

昭和五十年八月十七日宿毛に上陸した台風五号により高知県下は未曾有の集中豪雨によって七十二名の尊い人命を失うという大災に見舞われた。土佐市でも時間雨量百十七ミリ・二十四時間雨量五百五十三ミリを記録した。ここ鳴川部落では十七日午後四時二十分頃突如かくしが谷付近より山津波発生し、山鳴りの轟音と共に岩石濁流怒濤の如く落下し瞬時にして人命・家屋・田畑・道路を席卷した。又中大峠の山津波をはじめ山崩れ・崖崩れ等無数に発生し、殉難者二名・重傷者三名・軽傷者二名・家屋の全壊四戸・流失三戸・半壊五戸・床上浸水十戸・他は全戸殆ど床上浸水流失田畑約十五ヘクタール・土積流多量に及ぶ惨状となった。有史以来の深刻な衝撃と混乱の中から隣人愛に燃えた地区民一同協力一致して立ち上がり、部落百年の大計のため災害の早期復旧と谷川の抜本的改修等対策を市当局に要請した結果、四億七千二百六万三千三百七十六円が投入され地元も又用地・私財・労力を提供し、三年に亘る大改良工事が施工せられた。

災害のため他部落へ移転を余儀なくされた戸数九戸・宅地移転五戸に及び現在百世帯三百六十名となったが、道路・堤防・崩壊箇所・流失田畑の改良と共に谷川は数倍の流量となつて魍魎部落民の悲願はほぼ達成した。災害以来六か年を経過した現在「禍を転じて福とした」ことを鳴川悠久の流れと共に永く後世に伝えるべく、ふるさとの繁栄を祈願してここに記念碑を建立する。

昭和五十六年八月十七日（一九八一年）

鳴川部落民一同



交通案内

◎JR土讃線高知駅下車

県交通バス高岡行き高岡営業所下車 車で約5分

所在地

高知県土佐市鳴川

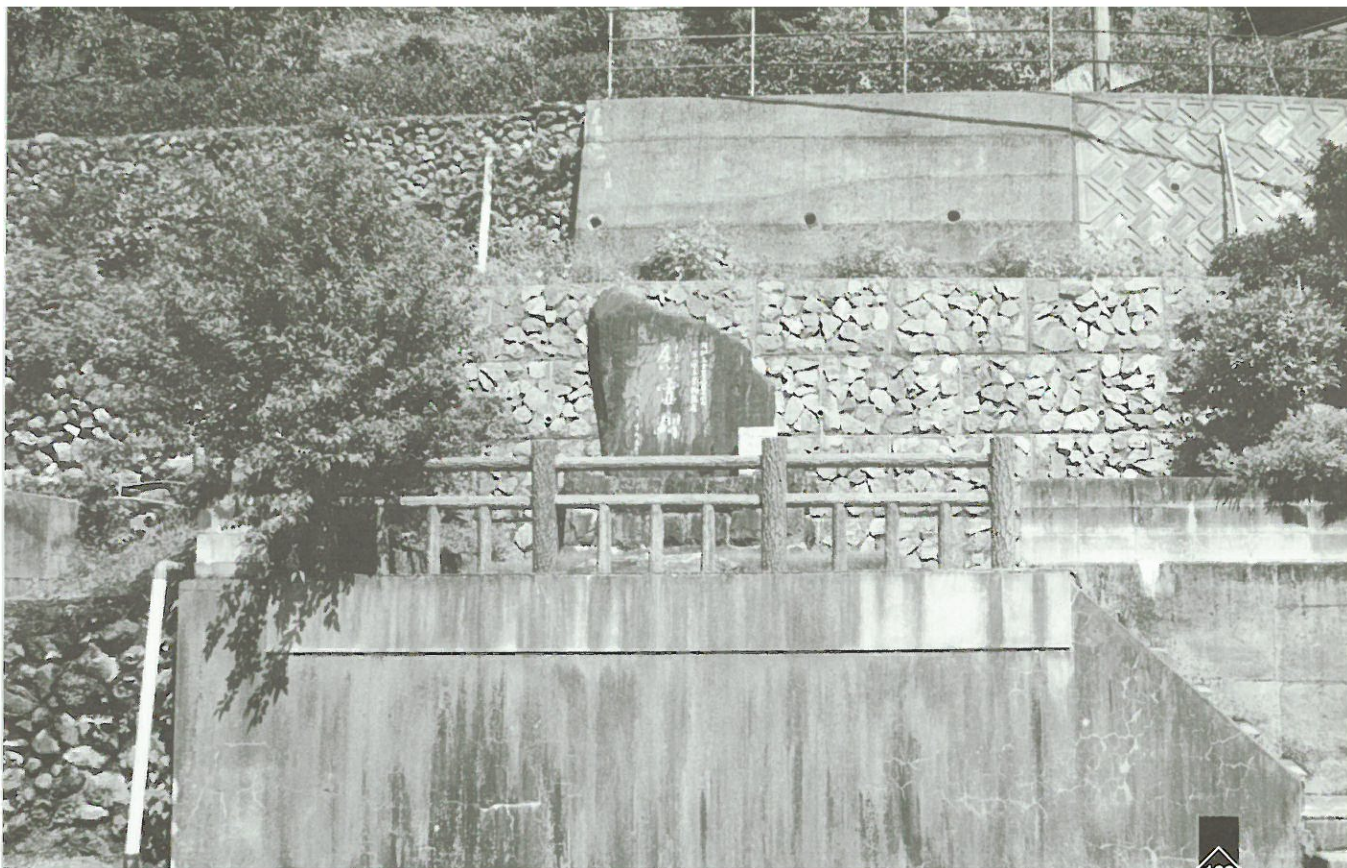
水系名及び溪流名

仁淀川水系番根川

問い合わせ先

高知県防災砂防課 電話0888-23-1111(代表)
0888-23-9842(直通)





108

高知県

◎ 建立者／伊野町

◎ 建立年／昭和五十二年八月十七日

慰霊碑

昭和五十年八月十七日、高知県を直撃した台風五号は県中部に記録的な集中豪雨をもたらし、各地に無数の土砂災害や浸水被害が発生した。このため十九市町村に災害救助法が適用されるなど、高知県災害史上未曾有の激甚災害となった。その被害は人的被害七十七名、建物被害三万四千四百五十八棟、公共施設の被害総額一千四百億円に達した。

伊野町もこの豪雨によって甚大な被害をこうむり、二十三名の尊い犠牲者を出した。なかでも神谷割石地区においては、集会所に避難中の住民が土石流の被害を受け、一度に六名の犠牲者を出す惨事となった。そこで伊野町は昭和五十二年八月十七日、この災害の教訓を永く伝え、犠牲者の冥福を祈るためにこの慰霊塔を建立したものである。

神谷割石地区より本川上流の勝賀瀬川長原比地区の昭和50当時と平成6年現在の写真です。

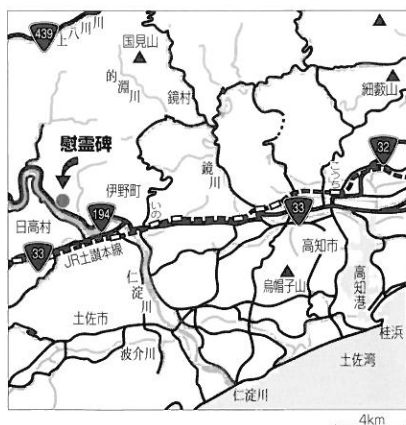
この地区でも1名の犠牲者を出しています。



S50.8



H6.8



▶ 交通案内

◎ JR土讃本線伊野駅下車

県交通バス柳の瀬・長沢行き割石バス停下車

▶ 所在地

高知県吾川郡伊野町割石

▶ 水系名及び渓流名

仁淀川水系割石川

▶ 問い合わせ先

高知県防災砂防課 電話0888-23-1111(代表)

0888-23-9842(直通)



碑文

表面

昭和五十年八月十七日

台風五号殉難者

慰霊碑

高知県知事 中内力書

裏面

殉難者名

三宮積子 西川芳於 松崎速男

三宮通典 尾崎 藤 岡部真澄

濱田秀野 尾崎正勝 伊藤計義

濱田勇子 尾崎香代 森本壽美子

尾崎幸雄 尾崎美恵 森本壽子

尾崎恒夫 中岡輝子 山本康彦

田村 生 中岡秀夫 山本鶴壽

尾崎年於 中岡ひとみ





109

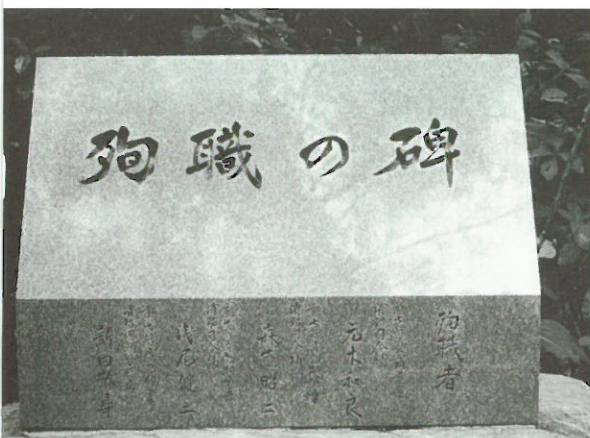
徳島県

◎ 建立者／木屋平村・美馬東部消防組合
◎ 建立年／昭和五十一年八月二十三日

殉職の碑

昭和五十年八月二十二日から翌二十三日未明にかけて徳島県木屋平村を襲った台風六号は、昭和十三年以来という大災害をもたらした。その被害はきわめて甚大で、なかでも川井地域、三ツ木地域では山腹の崩壊が起こり、民家や道路に流出した。また、この崩壊によって生き埋めとなった滝本信義(当時中学三年生)さんの救出作業中に二回目の崩壊が起こり、消防団員一名、美馬東部消防木屋平分署職員三名が殉職した。

昭和五十一年八月二十三日、木屋平村と美馬東部消防組合は殉職者の一周忌にあたり、この災害の実態を後世に伝えとともに殉職した人々の霊を慰めるためこの石碑を建立したものである。



碑文

殉職の碑

殉職者

熱七等青色桐葉章

消防指令補

元木和良

熱七等青色桐葉章

消防指令補

森下昭二

熱七等青色桐葉章

消防指令補

浅尾健二

熱七等青色桐葉章

消防団副分団長

新田敬尋

頌詞

道を学ばば人を愛するにある歟

兄等任ありて謹直事に鑑み

て率先射新常に郷民の

防夫となる

嗚呼時哉昭和知命の初秋

豪雨沛然鳴山崩壊す難に赴い

て快然身を外に忘る

嗚呼命哉春秋の鈴ここに亡く

惟鐘破耳の白雲を渉るを聴く己矣

銘曰百年千里聞名響風

万世有師清風不墜

千眼智見 選

大塩寿遊 書

碑文

時惟れ昭和五十年八月二十三日天魔に魅せられた台風六号は沛然たる豪雨を伴い、剣山周辺に突如として来襲し雨量は八百

耗という未曾有の記録を示すにいたったここに木屋平村は災害対策本部を設置し非常召集を發令した

天は我に味方せずこの豪雨下により続発し木屋平村川井地区に發生した山崩れにより生理となつた少年を救出すべく救援活

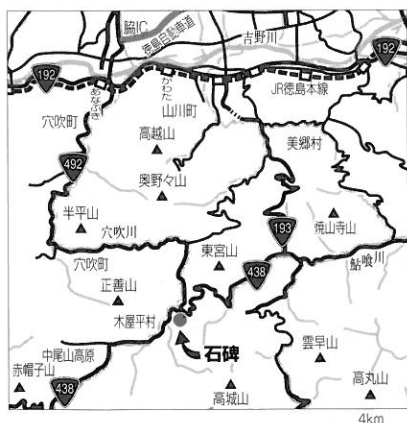
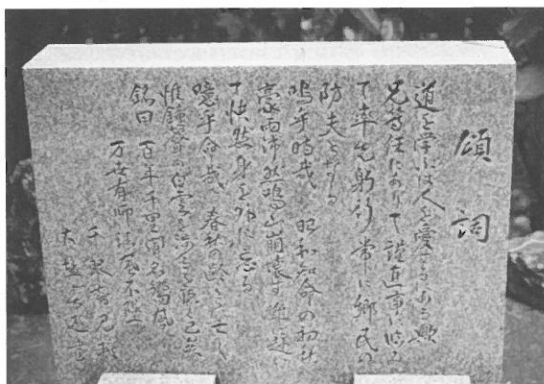
動中の消防職員三名消防団員一名は再度来襲した山津波の奥深く吞まれ少年と共に呼べど答えずさがせど見えず黄泉の宕と

なる然しこの英雄的活躍は永遠に郷土人の胸中に去来するものであるここに碑を建立しその霊を慰める

昭和五十一年八月二十三日

美馬東部消防組合管理者 吉田真一

木屋平村長 藤田巖夫



交通案内

◎JR穴吹駅から木屋平連絡バス 木屋平村役場バス停下車 徒歩20分

所在地

徳島県美馬郡木屋平村字川井

水系名及び溪流名

吉野川水系穴吹川

問い合わせ先

徳島県砂防防災課 電話0886-21-2544





110

徳島県

◎建立者／木頭村

◎建立年／昭和五十二年九月

慰霊碑

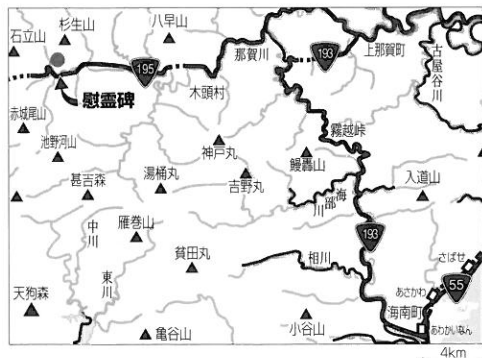
昭和五十一年九月三日に発生した熱帯低気圧は、四日に台風十七号となつて鹿児島南西海上に停滞していた。徳島県那賀郡木頭村では台風の影響で六日間雨が降り続き、総雨量は二千七百八十二ミリを記録した。台風が去つた直後の十三日午後一時三十分頃、突如西ノ谷山が崩壊。膨大な量の土石流は宅地を引き裂き、農地を壊滅させ、平部落の大半を埋めつくした。

このため死者六名をはじめ家屋、道路、橋梁、河川、農林施設など多大な損害を同村にもたらした。そこで一周忌を迎えた昭和五十二年九月、犠牲者の冥福を祈るために災害の記録と遭難者の氏名を刻んだ石碑を建立したものである。

碑文

表面
慰霊 水法
裏面

昭和五十一年九月台風一七号鹿児島南西海上に停滞し、木頭村においては、九月八日より六日間大雨が降りつづき、総雨量二千七百八十二ミリメートルを記録する。台風の去った直後、九月一三日午後一時三十分頃、突如西ノ谷山が崩壊、膨大な土石流は瞬時にして平部落の大半を埋める。
平若市氏(四四)は自宅付近の畑において、平弘一氏(四三)は自動車で通行中、藤本綾子(二四)芝貞雄(五九)李茂生(二五)李南載(四七)の四氏は宿舎においてそれぞれ土石流にのまれ死亡する。
ここに一周忌を迎え冥福を祈り碑を建てる
昭和五十二年九月 木頭村



交通案内

◎JR徳島駅から徳島バス出原行き北川バス停下車

北川バス停から木頭村営バス 平バス停下車 徒歩20分

所在地

徳島県那賀郡木頭村大字北川字平

水系名及び溪流名

那賀川

問い合わせ先

徳島県砂防防災課 電話0886-21-2544





111

徳島県

◎ 建立者／穴吹町

◎ 建立年／昭和五十四年三月

防災移転記念碑

昭和五十一年（一九七六年）九月八日から十三日にわたり、徳島県の穴吹町は大型台風十七号による豪雨に見舞われた。山腹崩壊、地すべり、河床の土砂堆積など過去に例のない事態が町の南部全域で発生し、甚大な被害をもたらした。死者・行方不明二名、住居の全半壊百二十六戸、田畑の冠水や埋没もおびただしかった。特に下森、四合地、左手、鍵掛の四集落の住民への打撃は大きく、今後の安全対策面での不安もあつたことから、他地区への移転が決定された。町では防災集団移転促進事業計画を策定し、用地造成を行い、三つの団地への移転をはかることで、住民の切羽詰った要望に応えた。この石碑は、移転が無事に果たされたことを記念して、建てられたものである。



穴吹町下森

被災状況



穴吹町四合地



▶ 交通案内

◎ JR徳島本線穴吹駅下車 車で10分

▶ 所在地

徳島県美馬郡穴吹町口山字初草
徳島県美馬郡穴吹町穴吹字藤ノ本
徳島県美馬郡穴吹町三島字小島

▶ 水系名及び溪流名

吉野川水系穴吹川

▶ 問い合わせ先

徳島県砂防防災課 電話0886-21-2544

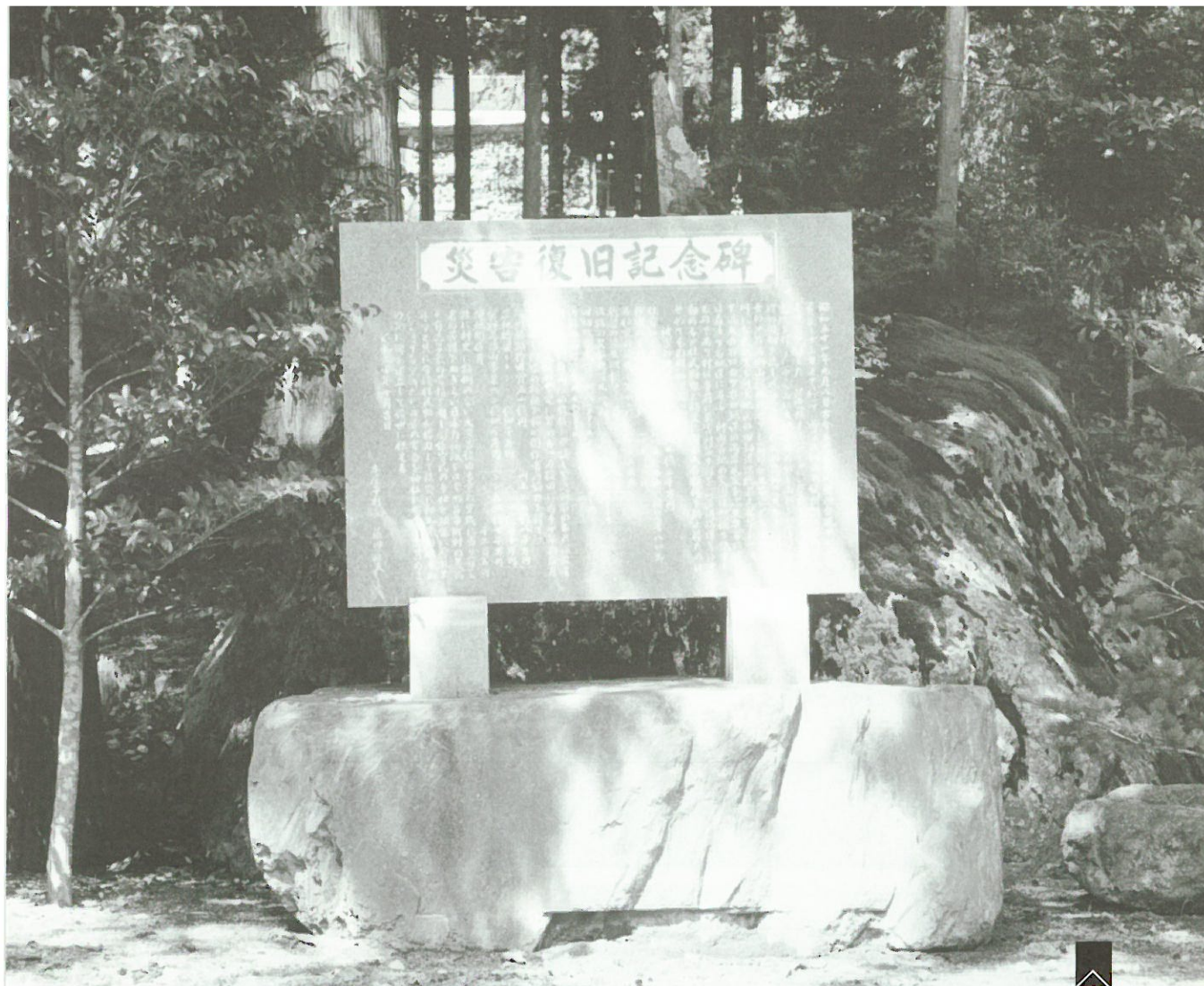


災害復旧記念碑

昭和五十一年（一九七六年）九月八日、大型台風十七号が来襲し十三日まで停滞し、剣山測候所で百八十三ミリを記録する豪雨をもたらした。昼夜を問わず雷鳴と閃光を伴いながら降り続く雨は、山肌を裂き、土石流を発生させた。特に徳島県美馬郡木屋平村の富士の池谷両側山腹の地すべりと崩壊が著しく、土石流となって垢離取川になだれ込み、川上地区の民家、田畑、橋梁などを呑み込んだ。適切な避難処置で、人命の損傷がなかったのがせめてもの慰めであったが、下流の太合、谷口カケ、谷口地区に及ぶ被害は甚大であった。

村は激甚災害の指定を受け復旧作業に着手。十年にわたる歳月を費やして工事は完成を見た。これを記念して昭和六十年十月に、災害復旧記念碑が建てられたのである。

災害復旧記念碑



碑文

災害復旧記念碑

昭和五十一年九月八日、古今未曾有の大型台風十七号が来襲し十三日まで停滞、雨量は剣山測候所調べ一八三ミリを記録した。黒雲低く山麓を覆い、昼夜を問わず閃光雷鳴を伴う集中豪雨は、大地をゆるがし山肌を裂き溪谷を埋め田畑を流し民家を襲う。住民の恐怖最大なり。特に富士の池谷両側山腹の地滑りと崩壊が土石流となり、垢離取川になだれ落ち、川上地区の田畑道路橋梁民家等を一蹴し、下流太合・谷口カケ・谷口地区に及ぶ村内各地の災害は想像を絶するものであり、村は事前に災害対策本部を設置、消防団等の出動のもと住民の避難と防災に努め人命損傷を防止し得たのはせめてもの慰めであった。

被害の概況

被害総額六九億三千万円

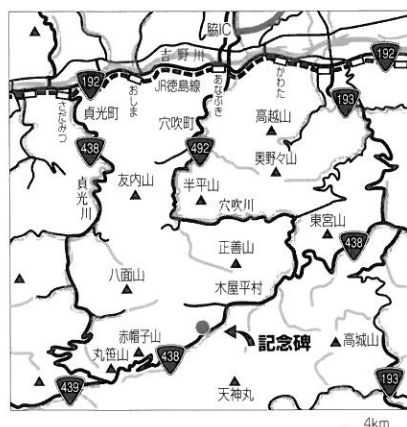
住家の流出	二八戸	川上地区
九戸 被災者	八四名	
住家の半壊	一八戸	
非住家の流出	三七戸	
二七戸		
橋梁の流出破損	一三基	
五基		
道路の欠損埋没	九一ヶ所	
県道 五キロメートル		
田畑の流出	農林道を含む 九八ヘクタール	
一二ヘクタール		
山林の崩壊流出	九七ヘクタール	
村は直ちに自衛隊の救援を要請し、緊急対策のもと罹災者の救援と民生の安定に努める。		



被災状況



被災状況



交通案内

◎JR穴吹駅から木屋平連絡バス妙見神社前下車 徒歩1分

所在地

徳島県美馬郡木屋平村字川上

水系名及び溪流名

吉野川水系穴吹川

問い合わせ先

徳島県砂防防災課 電話0886-21-2544



災害復旧記念碑

昭和五十一年（一九七六年）九月に徳島県穴吹町を襲った台風十七号は未曾有の惨事を生み出した。随所に地すべりが発生し、わけても古宮口山の被害は無残で、山頂からの崩壊で耕地、道路を破壊し数日にわたって集落を孤立させた。穴吹町は、実に死者一人、住家流失三千七戸、全壊四十五戸、半壊四十七戸という大被害を受けたのである。

町は海陸自衛隊の救助を要請し、緊急対策をとるとともに、国・県の援助を受けつつ三年余りを費やして、復旧に取り組んだ。町史上例のない大災害に対して、総額五十六億四千円余りを投じた復旧事業の完成に当たり、犠牲者を弔い、防災に努める決意を後世に伝えていく決意を込めて、激甚の地を選んで、この碑を建立したものである。

災害復旧記念碑

穴吹町

昭和五十一年九月八日未明の大型台風十七号は、穴吹町に甚大な被害をもたらした。古宮口山の崩壊により、耕地、道路が破壊され、集落が孤立した。死者一人、住家流失三千七戸、全壊四十五戸、半壊四十七戸という大被害を受けた。町は海陸自衛隊の救助を要請し、緊急対策をとるとともに、国・県の援助を受けつつ三年余りを費やして、復旧に取り組んだ。町史上例のない大災害に対して、総額五十六億四千円余りを投じた復旧事業の完成に当たり、犠牲者を弔い、防災に努める決意を後世に伝えていく決意を込めて、激甚の地を選んで、この碑を建立したものである。

昭和五十一年九月八日未明の大型台風十七号は、穴吹町に甚大な被害をもたらした。古宮口山の崩壊により、耕地、道路が破壊され、集落が孤立した。死者一人、住家流失三千七戸、全壊四十五戸、半壊四十七戸という大被害を受けた。町は海陸自衛隊の救助を要請し、緊急対策をとるとともに、国・県の援助を受けつつ三年余りを費やして、復旧に取り組んだ。町史上例のない大災害に対して、総額五十六億四千円余りを投じた復旧事業の完成に当たり、犠牲者を弔い、防災に努める決意を後世に伝えていく決意を込めて、激甚の地を選んで、この碑を建立したものである。

碑文

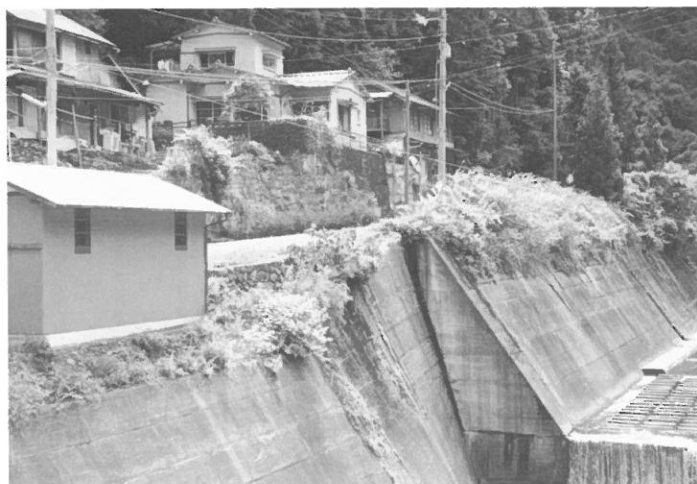
災害復旧記念碑

昭和五十一年九月八日来襲の大型台風十七号は十三日迄停滞し剣山観測値一八三ミリを記録する未曾有の断続的猛雨となり罹災二八五世帯一〇〇四名被害総額六十三億円に及ぶ大災害を齎した。特に古宮口山の災害は無残で随所に地切りが発生し美林は山頂から崩壊して住家を倒し耕地を潰し道路を破壊し溪谷を悉く埋め集落を孤立さすこと数日。死者二名長尾小学校落合分校穴吹高校古宮分校他家流失三十七戸の大惨事を惹起した。町は海陸自衛隊の救助を要請し緊急対策と民生の安定に努める一方三年有余を費やし国県の援助を併せ総額五六億四〇〇〇余万円を投じて復旧した。茲に町史上類例の無い大災害の復旧の完成に当り犠牲者の霊を弔い義援有志の芳情を謝し関係官民の功労を擣うと共に自今益々防災に努め住民和衷協力して定住の郷建設に邁進すべく形容一変せる激甚の地を選んで碑を建立し後世に伝える

昭和五十五年三月吉日



災害時



現況



交通案内

◎JR徳島本線穴吹駅下車 穴吹屋平線連絡バス 川上行き古宮バス停下車 徒歩3分

所在地

徳島県美馬郡穴吹町古宮字長尾559-1 穴吹町古宮生活改善センター

水系名及び溪流名

吉野川水系穴吹川

問い合わせ先

徳島県砂防防災課 電話0886-21-2544



114

兵庫県

◎ 建立者／兵庫県一宮町

◎ 建立年／昭和五十五年九月十三日

一宮地すべり記念碑

昭和五十一年九月の台風十七号がもたらした雨は八日から降り始め、十三日の朝までに連続降雨量五百八十二ミリ、十三日までの総雨量は六百三十七ミリを記録した。この大量の雨が引き金になり、十三日朝六時五十分には第一次崩壊が始まって人家一戸六名が生き埋めとなった。三人を救出したが、九時頃から山鳴りが大きくなり、全員が避難したものの幅三百メートル、深さ三十メートル、長さ二百五十メートルにわたって百万立方メートルの地すべりが発生。これによつて死者三名、全壊流失家屋四十戸に及ぶ大災害となったのである。この災害の復旧には七年の歳月と県・町の工事を合わせて約五十億円が投じられた。五十五年九月、一宮町は災害の教訓を後世に残すためこの石碑を建立したものである。

碑文

表面
山津波
裏面
銘

昭和五十一年九月、十七号台風の接近に伴う連続雨量は六二〇ミリに達した。これが誘因となり十三日午前九時三十分、この地抜山は鳴動とともに基石崩壊を起こし面積二〇ヘクタールにわたり、一〇〇万立方メートルの土砂が津波のように押しよせ死者三名、小学校々舎をはじめ公共施設、全壊流失四〇世帯に及ぶ大災害が発生した。われわれは、国県の経済助成と科学技術の指導により苦節四ヶ年、総額四十八億余円の巨費を投じて復興の業をなした。

ここに、当時の惨苦と、その後の苦闘をしのび多くの教訓を後世に遺すため、この碑を建立する。

昭和五十一年九月十三日

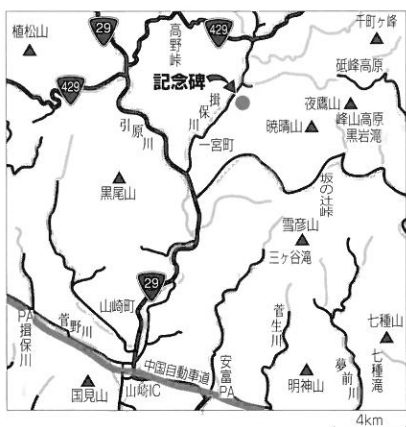
一宮町長 栗山 辰雄



被災状況



現況



交通案内

◎中国自動車道 山崎インターチェンジより国道29号を鳥取方面へ15km
曲里交差点を右折揖保川添いに7km 地抜山中腹

所在地

穴栗郡一宮町福知地内

水系名及び溪流名

揖保川水系福知地区

問い合わせ先

兵庫県砂防課 電話078-341-7711



白田切川土石流災害 殉難碑

昭和五十三年（一九七八年）五月十八日午前六時二十分頃、新潟県妙高山中腹の南地獄谷で地すべりが発生した。崩壊土砂は多量の融雪水を含み、下流の国有林の溪谷を浸食しつつ、土石流となった。これが新赤倉温泉街の上流で一部氾濫しながら流れ下っていったのである。

この災害で家屋とともに流された人や、災害調査中に二次災害に見舞われた役場職員等十三人の犠牲者が出た他、民家二十四戸の全半壊、国道・県道、JR信越本線の寸断等、甚大な被害が発生した。

このような災害が再び起こらないことと、十三名の被害者の冥福を祈るため、被災地を見渡す地に、殉難碑と観音像を建立したものである。



白田切観音

殉難碑 新潟県知事 君健男書
碑誌

昭和五十三年五月十八日、妙高山中腹の標高一千六百米付近の通称郷田原地籍で、突然大音響とともに大規模な地すべりが発生。

多量の融雪水を含んだ崩積土砂三十五万立方メートルは土石流となって一級河川白田切川に押し出し時速六十キロという想像を絶する速さで一気に溪谷を流下す。途中の河床や河岸の土砂をものみこみ、約九十万から百万立方メートルという龐大な土石となって押し寄せ、新赤倉温泉街の上流五百米付近から氾濫、有に三十屯もある巨石が土砂に浮き飛ぶように運ばれ、県道白妙橋をまたたく間に破壊し、旅館、別荘、保養所など四十八棟をのみこみ十三名の尊い生命を奪い去り、さらに国道、県道、町道、国鉄信越本線を寸断、農地農業用施設、ガス水道電気電話温泉などの施設も次々と破壊され被害は六十億円余の巨額に達し、この地に住む人々にとって永遠に忘れられぬ悲しい出来ごととなった。

このような悲惨な歴史が再び起こらぬよう防災対策に万全を期し、被災地を見渡すこの地に、殉難碑と観音像を建立する。

十三名のみ霊がとこしえに安らかであるよう冥福をお祈りし、災害の復興と郷土の安全、将来の平和繁栄を心から念ずる。

昭和五十四年八月

妙高高原町長 竹田克己

妙高高原地すべり災害殉難者

松橋 則子 十四才

塚田 義次 六十一才

畑山 忠夫 三十七才

畑山 美奈子 八才

小林 史郎 六十才

宮下 利雄 三十二才

丸山 良和 二十四才

玉置 平 五十三才

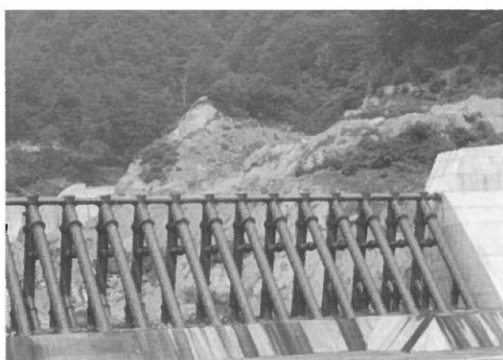
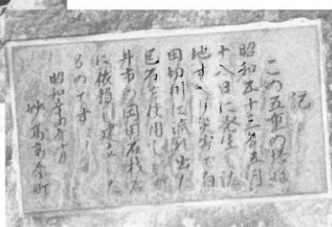
塚田 トヲ 六十一才

畑山 テル子 三十五才

畑山 俊之 六才

小林 ミル 五十六才

原田 多作 三十一才



完工した白田切川災害助成事業



新赤倉地区を襲う土石流



交通案内

◎JR信越本線妙高高原駅下車

川中島バス赤倉行き新赤倉バス停下車 徒歩約1分

◎国道18号田切交差点より2km 車で約3分

所在地

新潟県中頸城郡妙高高原町田切地先

水系名及び渓流名

関川水系白田切川

問い合わせ先

新潟県砂防課

電話025-285-5511



中頸城郡妙高高原町



116

岐阜県

◎ 建立者／岐阜県

◎ 建立年／昭和五十七年六月

復興之碑

昭和五十四年八月二十二日、岐阜県古城郡上宝村栃尾地区を中心に時間最大雨量八十三ミリという集中豪雨が襲い、洞谷上流の標高二千百メートル付近が崩壊。それが起因となつて同日午前七時五十分頃に土石流が発生して栃尾地区を直撃、旅行者の死者一名、行方不明者一名、住居の全半壊五十二戸などの多大な被害をもたらした。この災害は8・22豪雨災害と呼ばれている。

復旧工事は洞谷の大幅な改良復旧計画をもとに、岐阜県によつて同年十月に着工された。総事業費は四十三億円で、昭和五十七年六月に完成した。そこで、この地に再び悲惨な災害のないことを願い、地域住民の永遠の安住の地になることを念願してこの碑が建立されたものである。

碑文

表 面
裏 面
復興之碑 岐阜県知事 上松陽助

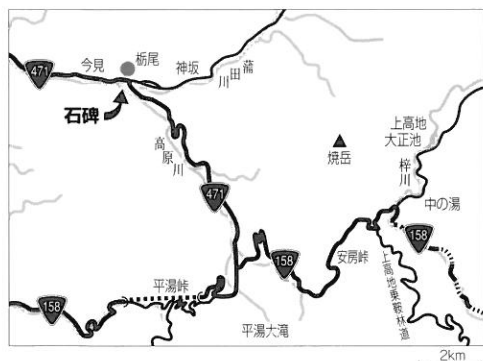
昭和五十四年八月二十二日午前七時五十分頃、栃尾地区を中心として襲った集中豪雨により、洞谷上流標高二一〇〇米付近の崩壊が起因となり、栃尾地区に次のような土石流災害が発生した。
連続雨量二百八十三ミリ 時間最大雨量(午前七時～八時)八十三ミリ
旅行者の死者二名 行方不明者一名 住民の負傷者四名
橋の流失三 中学校体育館半壊 住家全半壊等五十二戸
堆積土砂十立方メートル
総事業費四十三億円



被災状況



復興状況



交通案内

◎JR高山線高山駅下車 濃飛バス新穂高行き下栃尾バス停下車 徒歩5分

◎国道471号線栃尾交差点より400m

所在地

岐阜県吉城郡上宝村栃尾内

水系名及び溪流名

神通川水系高川支流蒲田川洞谷

問い合わせ先

岐阜県上宝村 電話0578-6-2111



左向谷砂防完成記念 護郷之碑

左向谷川は、和歌山県南部の中心地である田辺市を流下する会津川水系に位置し、台風の常襲地帯であるため、古くから度々土砂災害を被ってきた。

このため、和歌山県では明治四十一年から補助事業として会津川水系において砂防事業を実施してきた。

この左向谷川でも、雨が降ると鉄砲水がしばしば発生し、下流の民家や耕作地に被害を与えてきたため、強い地元の要望と熱意により砂防堰堤工や流路工が整備されてきた。

この石碑は左向谷川の一連の砂防設備の竣工を記念して建てられたものである。



文
表
面

左向谷砂防完成記念
護郷之碑

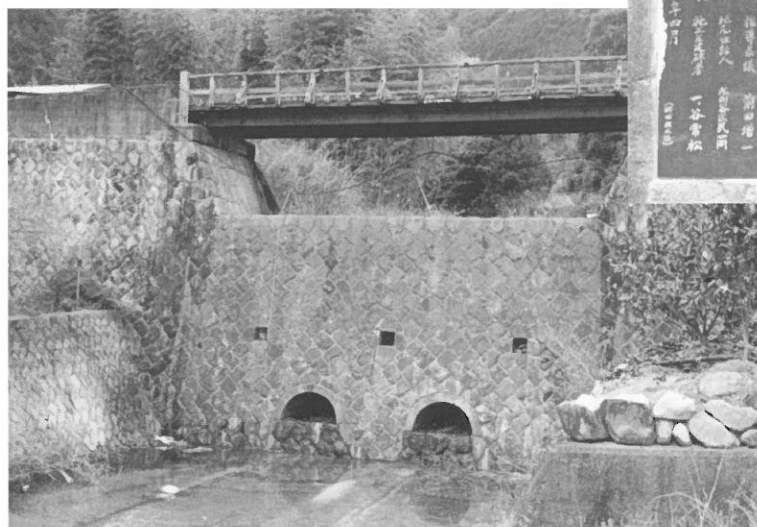
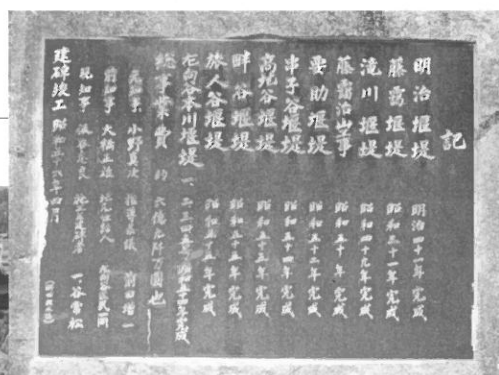
和歌山県知事 飯谷 志良 書

裏
面

記

明治堰堤 明治四十一年完成
藤鷲堰堤 昭和三十一年完成
滝川堰堤 昭和四十九年完成
要助堰堤 昭和五十年完成
串子谷堰堤 昭和五十二年完成
高知谷堰堤 昭和五十四年完成
畔谷堰堤 昭和五十五年完成
旅人谷堰堤 昭和五十五年完成
左向谷本川堰堤一、二、三、四、五号 昭和五十四年完成
総事業費 約六億九千万圓也
元知事 小野 真次 指導県議 前田 増一
前知事 大橋 正雄 地元世話人左向谷区民一同
現知事 飯谷 志良 施工並建碑者 一ノ谷常松
建碑竣工 昭和五十六年四月

(畔田親水誌)



左向谷川 砂防ダム



交通案内

- ◎JRきのくに線「さいたなべ」駅下車 龍神バス乗車15分
「左向谷口」停留所下車 徒歩20分
- ◎近畿自動車道阪和線 海南湯浅道路 湯浅御坊道路 国道42号
県道田辺龍神線を経て大阪より約3時間
田辺市内からは県道田辺龍神線を利用
- ▶所在地
和歌山県田辺市左向谷
- ▶水系名及び溪流名
会津川水系右支右会津川右支左向谷川
- ▶問い合わせ先
和歌山県砂防課 電話0734-41-3171





118

群馬県

◎建立者／建設省利根川水系砂防工事事務所

◎建立年／昭和五十六年六月

砂防事業一〇〇年 記念碑

石碑は昭和五十六年（一九八一年）に、建設省関東地方建設局利根川水系砂防工事事務所の手によつて建てられたものである。これより百年を逆上る明治十四年（一八八一年）、県による砂防事業が着手され我が国の近代砂防事業の執行体制が確立した。土砂災害から、人々の命と暮らしを守るための奮闘は、以来百年にわたつて営々と続けられてきたのである。

同事務所でも国土保全、民生の安定、社会資本の充実等に大きな貢献を果たしてきている。直轄砂防事業の意義を深く捉え直すすがとして、この石碑を建立したものである。石碑の立つ場所は、昭和二十二年九月にカスリーン台風で悲惨な土砂災害を経験した地である。未来に向けた砂防事業への決意を込めて、植樹とともに記念碑が建てられた。

表面

砂防事業100年記念植樹

昭和56年6月

建設省関東地方建設局

利根川水系砂防工事事務所

裏面

明治14年国や県などの公共機関において、土砂災害から人々の生活を守るために、本格的に砂防事業を開始してから今年で100年目に当たる。

昭と22年9月のカスリーン台風によって悲惨な土砂災害を体験したこの地で、明日の砂防に向けての決意を植樹に託して、ここに記念碑を建立する。



- ### ▶ 交通案内

◎JR上越線津久田駅下車 車で12分

◎国道17号伊熊信号右折 県道51号津久田信号左折
津久田信号より6km 車で12分

所在地

群馬県勢多郡赤城村長井小川田地先

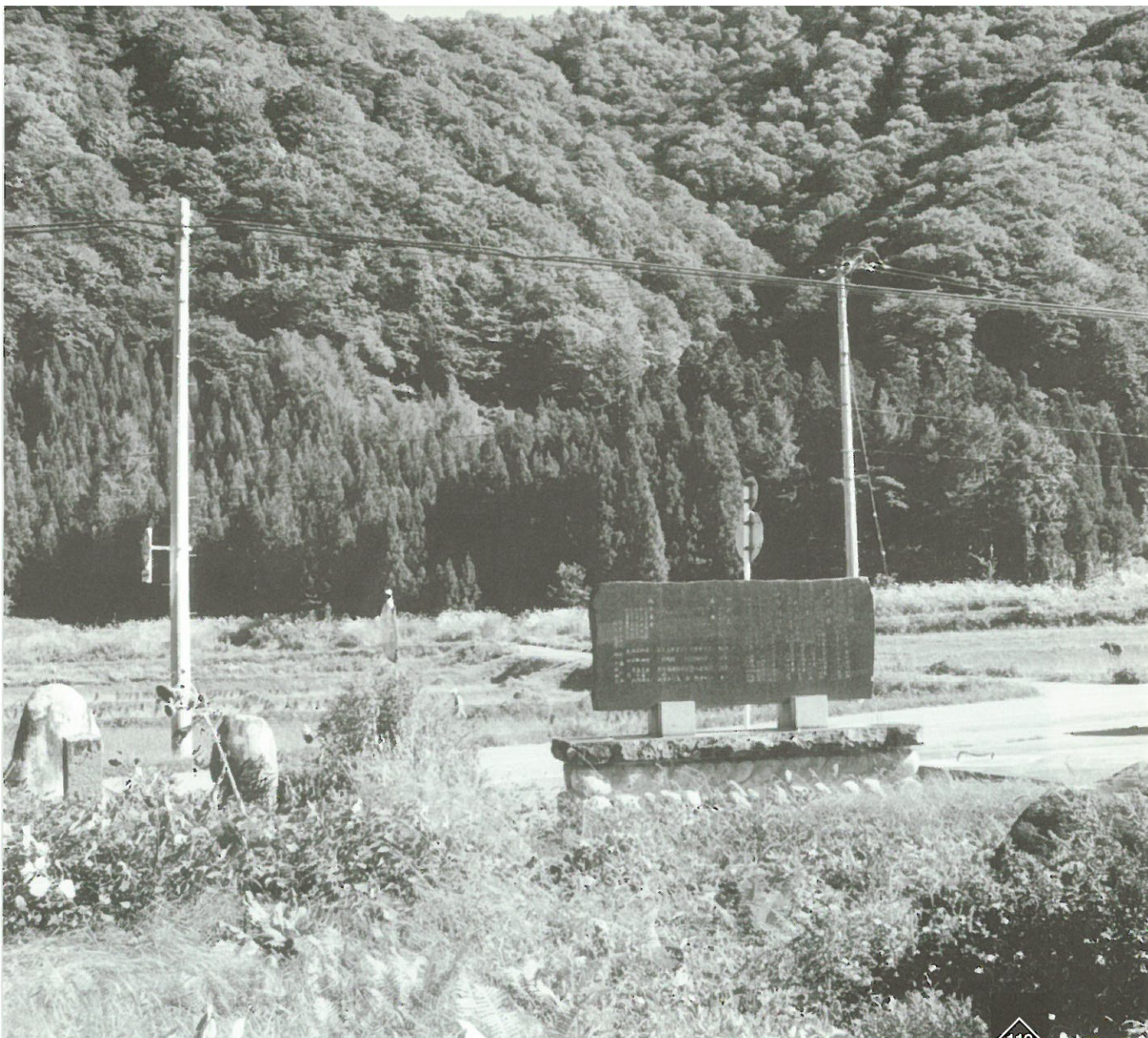
▶ 水系名及び溪流名

利根川水系左支沼尾川

▶ 問い合わせ先

建設省利根川水系砂防工事事務所 調査課 電話0279-22-4179





119

福島県

◎ 建立者／大原区民一同
◎ 建立年／昭和六十年八月吉日

新生大原記念碑

昭和五十六年七月二十一日夕刻、福島県鬼丸山地帯に集中豪雨が發生し、糸沢山より一万五千立方メートルの土石流が流出。一瞬のうちに大原地区の耕地を埋めつくし、さらに家屋、国道へと達して交通不能となる被害が發生した。このため大原地区には避難命令が発せられ、住民たちは公民館に避難するなど恐怖の一夜となった。この災害の復旧には五年の歳月と四億五千万円の巨費が投じられ、砂防ダム、流路工の新設やほ場整備事業など多くの事業を実施し、民生の安定と生産基盤の確立を図った。これらの一連の事業の完成を祝い、地元大原区民の栄代繁栄を祈念して、昭和六十年八月に大原区民一同がこの碑を建立したものである。

碑 文

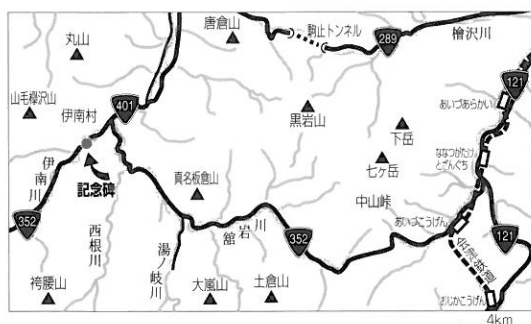
新生大原 記念碑

昭和五十六年七月二十一日夕刻、鬼丸山一帯に未曾有の集中豪雨が發生、糸沢山より一万五千立方メートルに及ぶ土石流が流出し一瞬のうちに耕地を埋めつくし家屋を襲い、さらに国道へ達して交通不能となる大災害をもたらした。このため、大原全世帯に避難命令が発せられ、老幼子女は小立岩地区公民館に避難するなど、区民を恐怖の淵にさらした。

区民は、早速消防団をはじめ大川地区民、村内建設業者の応援をうけて応急対策を施したが、膨大な土石に本復旧への策がなく、対応策を村に陳情、村は直ちに県の協力を得て全面的に支援、再発防止と本災害を転じて大原地区の一大改革を計策すべく、区民と共に議を重ね、砂防ダムや流路工の新設をはじめ、上平地区八十アールの開拓を含む圃場整備など、多くの事業を実施して、民生の安定と、生産基盤の確立を計った。

ここに、区民相協力し五年の歳月と四億五千万円の巨費を投じ、新生大原発展の礎が築かれたので、一連の事業完成を祝い、区民の永代繁栄を祈念して、この碑を建立する。

昭和六十年八月吉日
大原区民一同



交通案内

◎会津鉄道会津高原駅下車 国道352号を伊南村方面へ
国道352号と国道401号交差点から国道352号を檜枝岐村方面に2km

所在地

福島県南会津郡伊南村大字大原字上平地区 国道352号道路脇

水系名及び溪流名

阿賀野川水系糸沢

問い合わせ先

福島県砂防課 電話0245-21-7492



120

長野県

◎ 建立者／須坂市仁礼区

◎ 建立年／昭和五十八年十一月

災害復旧記念碑

昭和五十六年八月二十三日、台風十五号がもたらした豪雨により、長野県須坂市宇原川源流部で発生した土石流は、六キロの沢すじを一気に流下し、西原地籍を直撃した。土石流は仁礼地区を縦断し、十名の人命を呑み込む大惨事となった。また、この他流失家屋四十戸、損壊家屋十七戸、田畑の流失冠水十一町歩余、山林流失三十町歩余を数えた。

復旧工事は三カ年にわたり、激甚災害の指定を受けて国県および市の援助のもとに約九十億円余の巨費が投じられた。昭和五十八年十一月、その完成を記念し、地域の人々の「土石流災害の惨事を決して忘れないし、あの悲しみを再びくり返してはならない」という願いを込めた記念碑が西原の被災地に建立されたものである。

表面

災害復旧記念碑

長野県知事

吉村午良書

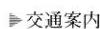
碑文

昭和五十六年八月二十三日未明、台風十五号の襲来と共に山岳地帯の集中豪雨により仁礼山口の沢上流附近の土砂崩壊が土石流となり宇原川沿岸の巨岩立木悉く席卷し泥濘濁流となり、恰も小山瞬動、暗空を圧して一気に下流を襲い、人家人命諸共一瞬にして呑み込み十名の尊い生命を奪いさる。加えて仙仁川これ又、濁流氾濫、合して鮎川沿岸を荒土と化し、家屋流失四十戸損壊十七戸、田畑の流失冠水十一町歩余、山林の流失三十町歩余の大きな被害を受け、正に言語に絶する大惨事となる。これこそ凄絶無惨極まりない痛恨事にして虚空聽見憤怒の思、この上もなく只々自然の猛威のなす業の恐ろしい、は全く言の外というべきである。仁礼地域に於つて、このような事は未曾有の事であり、かつてない大災害を被つたのである。

このようにとき、消防団の人命救助不明者の捜索活動住民の復旧への努力はめまぐるしいものがあつた。この間全国から多くの物心両面の温い援助を頂いたものである。この復旧に当つては激甚災害の指定を受けた国県及び市の援助のもとに九十億円余の巨費を投じ復旧工事に着手され三力年の年月を費やして以前に勝る河川或は農地の復旧事業が完了したのである。

ここに、本災害に於て特に銘記すべきことは、殉難犠牲者となられた尊い御霊の安らかに永眠されんことを念じ慰霊すると共に、再びかかる災害のなき事を念願し長く後世に伝承する意をもつて災害現場にこの碑を建立し永遠に記念するものである。

昭和五十八年十一月



- ◎長野電鉄長野須坂駅下車 長野電鉄バス仙に行き タカツバ停留所下車
徒歩5分
- ◎上信越自動車道須坂長野東インターチェンジから
主要地方道長野須坂インター線 国道406号を菅平方面へ約8km
車で約10分

所在地

長野県須坂市仁礼地籍

▶ 水系名及び溪流名

信濃川水系鮎川(宇原川)

▶ 問い合わせ先

長野県砂防課 電話0262-32-0111

長野県須坂建設事務所 電話0262-45-1670

